

# 確認強迫傾向者における リアリティモニタリングの実験手続きの吟味

児 玉 美 幸

## 問題と目的

何回も確認行為を繰り返す確認強迫行為の原因の一つに記憶が関与していると考えられている。特に、リアリティモニタリングの混乱が議論されてきた。リアリティモニタリングとは、われわれが外的記憶と内的記憶とを区別する際の過程である (Johnson & Raye, 1981)。外的記憶は、外的起源に由来する情報、すなわち知覚過程を通して得られた情報である。内的記憶は、推論、イメージ、思考といった内的過程によって生み出させた情報をいう。確認強迫の患者が、実際の出来事と記憶表象 (過去の記憶) であるイメージを区別できない可能性が考えられているのは、家を出てから鍵を閉めたのか、閉めた気になっているだけか分からないと訴えからである (杉浦, 2002)。

Sher et al. (1983; 1984) は、非臨床群を対象に、確認傾向が強いほど、自分のおこなった行動の記憶が悪いことを見いだした。その後の研究でも、他人の行動や見たり、書かれたものを見るよりも、自分自身の行為を思い出すことができないということが指摘されている (Rubenstein, Peynircioglu, Chambless & Pigott, 1993)。しかし、強迫性障害 (以下 OCD) と記憶・リアリティモニタリング (Constans, 1995) の関連を調べた研究では、必ずしも支持されるデータは得られていない。

このように、確認強迫者におけるリアリティモニタリングについて検討した先行研究では、リアリティモニタリングの混乱は認められないことから、確認強迫者で問題なのは記憶に対する自信の低さにあるとも考えられてきた。実際に記憶やリアリティモニタリングの障害がなく、自分の記憶に自信がもてないために何回も確認を繰り返してしまう可能性も考えられ、メタ認知の問題仮説を支持する結果も得られている (Sher et al. 1983; McNally & Kohlbeck 1993; Brown 1994)。

全般的リアリティモニタリング障害ではなく、不安を誘発される対象や行為のみ、思い出すことができなかったり、自分の記憶への確信度が低くなるという仮説もある。例えば、オープンをつけっぱなしにしているのが怖い人は、オープンを消したかの記憶が劣り、その他の場合では正常な記憶遂行であるという論考である (Constans, 1995; Radomsky, Rachman, 1999; 鶴木, 1999)。

また、強迫行為は定型的な動作が繰り返されるため、鍵を閉めたという記憶は、今朝のものだったかどうかなど、個々のエピソードの区別が難しいと言われる (Tallis, 1997)。杉浦 (1996) も、行為を反復するほど、行為の現実性や意味が不明になるとしている。

以上のように、OCD の行動の繰り返しに対する様々な仮説の検討研究がおこなわれている。しかし、先行研究では一貫した結果は得られていない。その理由として、課題内容や実験手続き上の問題があり、確認強迫者の記憶の特徴について議論できなかった可能性が考えられる。本研究では、リアリティモニタリング課題について検討した。

リアリティモニタリング研究では、次のようなリアリティモニタリング課題を用いて検討がおこなわれてきた。最初に刺激や動作などを自分が見たり行ったりする条件 (知覚項目) と、自分の頭の中でイメージしたり考えたりする条件 (想像項目) で学習させる。その後、学習した際に「見た (知覚)」ものであったか、「考えた (想像)」ものであったかを判断させる。この判断成績を比較することで、リアリティモニタリングができているかどうかを調べている。

Sher et al. (1983) は、48 個の単語が読んだものか、語幹からイメージしたものかを尋ねられる課題を用い、McNally & Kohlbeck は、計 60 個線画と単語を刺激としたリアリティモニタリング課題を用いて、確認強迫者と健常者で判断成績を比較した。McNally & Kohlbeck は、知覚項目は刺激をペンでなぞる条件と刺激を見る条件を、イメージ項目は呈示された単語や

線画を自分がなぞるところを想像する条件を設定した。Rubenstein らは、90 個の動作表現を書く・見る・行動するという実験と 60 個の単語朗読条件と単語完成課題条件の実験をおこなった。Constans らは、鍵を閉める・ろうそくの火を消すなど不安を喚起する動作を含む計 20 個についての 6 つのアクションシーケンスを用いて、確認強迫者と健常者のリアリティモニタリングについて検討した。知覚項目は動作を実際におこなわせる条件であり、イメージ項目は動作をおこなうところを想像させる条件であった。その結果、リアリティモニタリングの混乱は認められなかった。このように、先行研究では、単語や動作を用いて実験がおこなわれている。患者の報告によると、確認強迫者は自分の行動の記憶に対する記憶がなかったり (Sher, 1983)、記憶に自信がなかったりする (Herman, 2003)。

本研究では、確認強迫者は自分の行動の記憶に対して記憶が悪いことから、単語を刺激とした単語記憶課題ではなく、実際に動作をおこなう動作記憶課題を用いることとした。

又、不安を喚起する対象でも成績の差は見出せないことから (Constans, 1995)、不安対象に限定せず、日常生活で何気なくおこない、確認行為をおこなうと考えられる対象を設定した。実験 1 では、ニュートラルな刺激を用い、Constans らと同様の実験手続きで、確認傾向者と非確認者の比較検討をおこなった。次に実験 2・3 で、実験課題のアクションシーケンスや項目数が、リアリティモニタリングの判断成績とその確信度に及ぼす影響を検討した。

## 方 法

### 実験 1

**被験者：**Hodgson (1977) の Maudsley Obsessional Compulsive Inventory の日本語版 (以下 MOCI, 付録 1) に回答者した 1500 名の女子大学生・大学院生のうち、42 名に個別実験を受けてもらった。

**刺激：**本・ペンのキャップ・携帯電話・カッターナイフ・封筒／書類・チャック・ウォークマン／カセットテープ・鍵・名前・赤いピンとピンクのピン・バケツ／コップ／ポット・かばん／携帯電話・服のボタン・筆箱／ペン・ダイヤモンドゲーム・自転車の鍵・懐中電灯・紙・マッチ・オセロ

**実施場所：**1 室を 4 つの空間に分けた。1 と 2 のブースで 7 個のアクション課題、3 のブースで 6 個のアク

ション課題と計算課題、4 のブースで質問紙を行なった。

**実験条件：**1500 名の MOCI のデータを因子分析した。そのうち、確認因子が抽出された。そこで、確認因子 3 項目 (Q 6, Q 15, Q 22) 中 1 項目にでもあてはまる人 (34 名) を確認群、どの項目にも当てはまらない 0 点の人を非確認群 (8 名) とした。独立変数は確認傾向 (確認群と非確認群の 2 水準)・アクションの種類 (イメージと実際の 2 水準) で、従属変数はリアリティモニタリングの判断成績、確信度とした。

**実験計画：**確認 (確認群・非確認群) を被験者間要因、アクションの種類 (イメージ・実際) を被験者内要因とする 2 要因混合計画とした。

**手続き：**被験者は小冊子で 6 つのアクションシーケンスを示され、実際に動作したりイメージし、行為の再生とリアリティモニタリング課題を行った。先行研究では、視覚的提示をしていたが、本研究では実験者がアクションを読みあげる聴覚的提示し、行為が終了したら次の指示があるまでは目を閉じてもらうことにした。

実験の流れは次のようである。まず日常生活で行う行為と確認に関する研究として説明した。これは、被験者が行為課題終了後に記憶が査定されることに気づかせないためであった。被験者は実験者の合図で 4 つのブースを順番に回り、1 のブースで対象事物の名前が書かれた小冊子を渡され、実験の説明を受けた。被験者がページをひらくと事物が呈示され、実験者が 6 アクションを順番に口頭で伝えた。1 つの事物が終了すると、次のページに進む。まず、練習課題 (ペットボトル) を行った。20 個の課題が全て終了したら、5 分間計算課題を行い、その後、実験者の説明受けてから質問紙 (リアリティモニタリング課題) に答えてもらった。質問紙の項目順序、刺激提示順序はランダムにした。実際に行ったのか、それともイメージしたのか、あてはまる方を○で囲み、どんな行為であったのかを再生し、その回答に対する確信度を 1 (少しも確信がない)~7 (非常に確信がある) までの間で、最もあてはまるものを 1 つだけ選択し、その数字を○で囲んでもらった。

<課題例：本を開く→本を閉じるイメージ→本を閉じる→本を開くイメージ→本を閉じるイメージ→本を開く>

## 結 果

リアリティモニタリングの正答率は、最後の行為が

どのような動作であったか正確に再生でき、且つイメージが実際に正しく選択できた個数から算出した。正答率は角変換を行い、分散分析を行った。その結果、群の主効果 ( $F(1,40)=0.45, p>.05$ ) は有意ではなかったが、アクションの種類の主効果は有意であった。 ( $F(1,40)=15.19, p<.01$ )。これは、最後実際に動作した項目の方が、正しいモニタリングができていることを示している。交互作用は5%水準で有意とは言えなかった ( $F(1,40)=3.11, p>.05$ )。正答率は、確認群と非確認群ともに非常に低く、50%以下であった。

リアリティモニタリングの確信度は、各項目で、被験者自身の行ったリアリティモニタリングの回答が正しいと思う確信度(自信)を、「少しも確信がない」を1として「非常に確信がある」の7までの7段階で回答を求めた。1点から7点までの得点化を行い、リアリティモニタリングに対する確信度の平均を算出した。分散分析の結果、群の主効果 ( $F(1,40)=1.25, p>.05$ ) は有意ではなかったが、アクションの種類の主効果が有意であった ( $F(1,40)=13.41, p<.01$ )。群とアクションの種類の交互作用は有意ではなかった ( $F(1,40)=0.78, p>.05$ )。最後実際に行った項目に対して、リアリティモニタリングが正確に行えたと感じていると言える。

## 考 察

実験1では、リアリティモニタリングとその確信度、いずれの従属変数においても、確認群と非確認群の間に差はなかった。すなわち、確認群にリアリティモニタリングの悪さ、確信度の低さはみとめられなかった。これは、Constans が OCD の患者と健常者を比較した研究結果と一致する。

実験1では、Constans とリアリティモニタリング課題を一部変更しておこなった。その変更点は、リアリティモニタリング正答の基準を、行為の記憶再生が正解で且つ正しくリアリティモニタリングできたものとしたことである。理由は、例えば「お財布を鞆から出したり、入れたり」を繰り返したような場合に、結局どちらの動作で終わったのか分からなくなったり、「入れようとしていた」だけだったのか混乱して確認することがあるだろう。このとき、動作の記憶ならびにリアリティモニタリングという記憶のモニターが必要になってくると思われる。動作だけ覚えていてもリアリティモニタリングを間違えることもあるだろうし、その逆で、動作を間違えて記憶してリアリティモニタリングは正しい場合もある。Constans は“実際かイメ

ージか”というリアリティモニタリングさせるだけなので、動作が正確に思い出せていないもので正答として含まれる。また、二択問題なのでの偶然に正解する場合もあるだろう。この問題を少し排除するための変更であった。

しかし、リアリティモニタリングの平均正答率は確認群と非確認群の間に差は認められず、両群ともに50%にも満たない低い値を示した。他の研究では、正再認率は確認強迫傾向者と健常者ともに平均80%を超えていた (Rubenstein et al., 1993)。又、大谷 (2003) も正再認率が70%~85%となっている。よって、この課題は、誰にとってもリアリティモニタリングをするには難しい記憶課題であったと考えられる。

また、確信度の低さもみとめられなかった。その理由として、次の調査を参考にした。筆者は、実験をおこなう前に、『確認行動に関する調査』で、「例えば外出の際、鍵をかけてきたのかどうか記憶をたどっても“鍵をかけた”という自信が持てないようなことがあるかもしれません。このように一度おこなった事を思い出せる記憶力にどれくらい自信があるかを、“全く自信がない”を1として“非常に自信がある”の7までで最も当てはまる数字に1つだけ選択して下さい。」という7段階評定の質問を MOCI と同時に実施した。MOCI 総得点と7段階の評定得点、および Hodgson & Rachman (1977) 確認下位尺度得点と7段階の評定得点にそれぞれピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、MOCI 総得点との相関は  $r=-0.13$ 、確認下位尺度得点との相関は  $r=-0.13$  であり、どちらとも相関はなかった。このことから、確認傾向あるいは強迫行動は自分の記憶力への自信のなさとはむすびついていないと考えられる。つまり、確認傾向の人が常に記憶への自信に欠けているのではなく、状況に左右されて記憶に自信を持てない状態であると考えられる。

実験1状況下では、確認傾向とは無関係に全ての被験者が記憶に自信がない状態になっていた。一般的に、記憶しにくい状況で、記憶への確信度を低く評価しているという結果ではないかと考えられる。すなわち、実験課題が記憶しにくい状況で、確認傾向者が記憶の確信度の低く評価するような状況ではなかったと思われる。よって、課題吟味の為、容易と考えられる課題を設定し実験をおこなう必要があった。そこで、本実験課題が難易度の高いものなのかを検討するために、実験2では何度も動作を繰り返すというアクションのシーケンスを除いて実験1と比較検討をおこな

い、実験3では項目数を減らすことで難易度に関わっているのかを検討した。

### 実験2 (繰り返しの検討)

#### 目的

実験1では1つの事物に対して6つのアクションの繰り返しだが、リアリティモニタリングが困難な状況となる実験状況であったかを、アクションの繰り返しがない20項目の結果と比較検討をおこなうことを目的とした。

#### 方法

被験者：女子大学生 54名

刺激：実験1と同様の刺激を用いた。

実験条件：独立変数は繰り返しの有無 (繰り返し有群 (実験1の被験者42名) と繰り返し無 (12名) の2水準)・アクションの種類 (イメージと実際の2水準) で、従属変数はリアリティモニタリング、確信度とした。

実験計画：繰り返しの有無2群 (繰り返し有群・繰り返し無群) 被験者間要因とし、アクションの種類 (イメージ・実際) を被験者内要因の2要因混合計画とした。

手続き：実験1とほぼ同じ手順であった。1つの対象につき1アクション (実際かイメージか) おこなってもらふ点と妨害課題として5分間県庁所在地を書き出してもらふ課題を追加した点だけが異なっている。記憶課題に入るまでの時間を実験1とほぼ同じ間隔に調整するために、20個の課題が全て終了後、5分間計算課題を行い、A4白紙の用紙に5分間日本の県庁所在地を思い出せる順番に書き出してもらった。その後、実験者の説明を受けて質問紙に答えてもらった。

<課題例：本を開く、あるいは本を閉じるイメージ>

#### 結果

リアリティモニタリング正答率は、実験1と同様の手続きで算出した。分散分析をおこなった結果、群の主効果 ( $F(1,52)=333.85, p<.01$ ) とアクションの種類的主効果は ( $F(1,52)=16.71, p<.01$ ) 有意であった。しかし、群とアクションの種類の交互作用は有意ではなかった ( $F(1,52)=0.31, p>.05$ )。

実験2では、繰り返し有群は50%以下の正答率に対し、繰り返し無では高い正答率を示している (図1)。よって、実験1の課題が難しいものだったことがわかる。又、最後に実際に動作をおこなった方が、正

しいリアリティモニタリングができることがわかった。

リアリティモニタリングの確信度は、実験1と同じように7段階で回答を求めた。1点から7点までの得点化し、アクションの種類別にリアリティモニタリングに対する確信度の平均を算出した (図2)。分散分析の結果、群の主効果 ( $F(1,52)=136.33, p<.01$ )、アクションの種類の主効果ともに有意であった ( $F(1,52)=49.48, p<.01$ )。群とアクションの種類の交互作用も有意であった ( $F(1,52)=4.3, p<.05$ )。そこで下位検定をおこなったところ、イメージにおける繰り返しの効果 ( $F(1,104)=108.82, p<.01$ )、実際における繰り返しの効果 ( $F(1,104)=137.90, p<.01$ )、繰り返し有におけるアクションの種類の効果 ( $F(1,52)=12.21, p<.01$ )、繰り返し無におけるアクションの種類の効果 ( $F(1,52)=41.64, p<.01$ )、すべて有意であった。

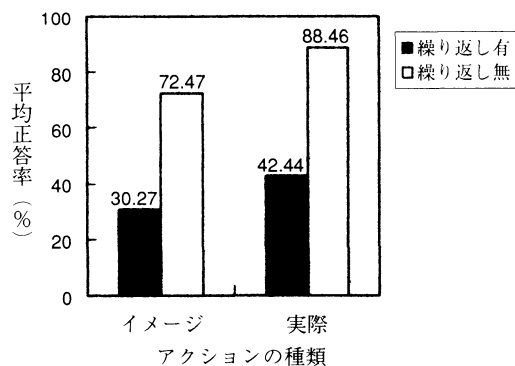


図1 リアリティモニタリング正答率

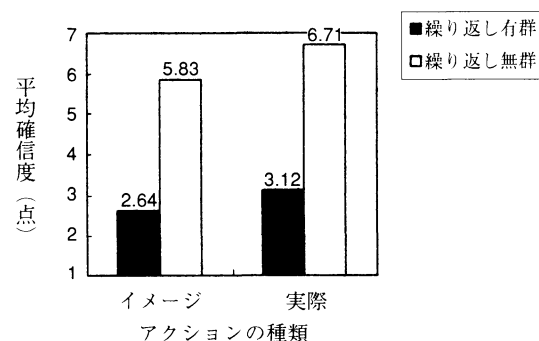


図2 リアリティモニタリング確信度

#### 考察

繰り返し有 (実験1) の群の方が、繰り返し無群よりも、正答率が低く、確信度も低いという結果を得た。実験1同様、実際におこなった方が、イメージのものよりも正答率が高く、その確信度も高かった。

このことから、実験1の結果は、記憶しにくい実験

課題であったと言える。

しかし、繰り返しといっても同じ動作の繰り返しではなくアクションのシーケンスであるため、単なる繰り返しの効果とは言えないところはある。20個の動作やイメージを記憶することと、20個の対象に各6アクションをするのでは、記憶する量にかなり差がある。そのため、記憶した動作の数が、成績や確信度の違いに影響した可能性も今後、検討する必要がある。

### 実験3（項目数の検討）

#### 目的

実験1は20項目で実施したが、ほとんどの被験者のリアリティモニタリング正答率がチャンスレベルであった。そのため、12項目に項目数を減らすことによって、リアリティモニタリングの成績は高くなり確信度も上がるかどうかを検討した。

#### 方法

被験者：女子大学生・大学院生 55名

刺激：実験1より、リアリティモニタリング正答率の高い6項目、低い6項目、計12事物を選定した（本・ペンのキャップ・携帯電話・カッターナイフ・封筒／書類・チャック・ウォークマン／カセットテープ・鍵・名前・赤いピンとピンクのピン・かばん／携帯電話・服のボタン）。

実験条件：独立変数は項目数（20項目群（本実験の被験者42名）と12項目群（13名）2水準）・アクションの種類で、従属変数はリアリティモニタリング、確信度とした。

実験計画：項目群（20項目群・12項目群）被験者間要因、アクションの種類（イメージ・実際）を被験者内要因とする2要因混合計画とした。

手続き：実験1と同様で、手続きで異なっている点は項目数が12項目になったことであった。

#### 結果

リアリティモニタリング正答率は、分散分析の結果、群の主効果（ $F(1,53)=0.001$ ,  $p>.05$ ）、アクションの種類の主効果ともに有意ではなかったが（ $F(1,53)=1.23$ ,  $p>.05$ ）、群とアクションの種類の交互作用は有意であった（ $F(1,53)=4.96$ ,  $p<.05$ ）。下位検定の結果、20項目群の条件でのみ、アクションの種類の効果が有意であった（ $F(1,53)=5.58$ ,  $p<.05$ ）（図3）。

リアリティモニタリング確信度は、分散分析の結果、群の主効果は（ $F(1,53)=2.45$ ,  $p>.05$ ）有意ではなく、アクションの種類の主効果は有意であった（ $F(1,53)=15.95$ ,  $p<.01$ ）。群とアクションの種類の交互作用は有意ではなかった（ $F(1,53)=1.64$ ,  $p>.05$ ）。最後に実際動作をおこなった項目の方が判断への確信度が高かったと言える（図4）。

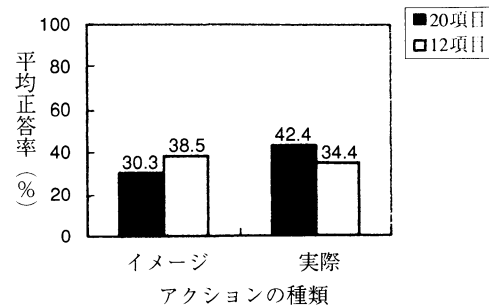


図3 リアリティモニタリング正答率（12, 20項目の比較）

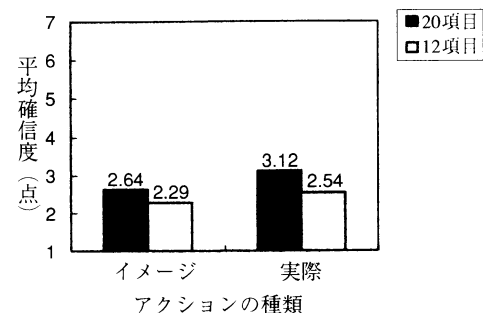


図4 リアリティモニタリング確信度（12, 20項目の比較）

#### 考察

項目数の違いによるリアリティモニタリング成績・確信度に差はみとめられなかった。項目数を約半数にすることによって課題が易しくなったとは言いがたい。

最後に実際動作をおこなった項目の方がリアリティ判断成績と確信度が高かった。しかし、12項目では、アクションが実際であるかイメージであるかによって、成績や確信度に影響はなかった。今後、項目の選定や内容について検討する必要があると思われる。

課題の吟味をしつつ、どのような状況で、何度も確認をするという行動特性が記憶の確信度の低さを導くのか、さらに検討していくべきである。

#### 結論

実験1では、確認傾向のある健常者のリアリティモニタリングについて検討をおこなった。その結果、確認傾向の人とそうでない人に、記憶成績や確信度の高

さの違いはみとめられなかった。実験状況によって、記憶成績は悪く、確信度も低くなったのではないかと考えられた。そこで、実験課題の検討を実験2・3でおこなった。その結果、実験1は、記憶しにくい状況であり、一般的に確認行動を誘発するような課題であったことがわかった。よって、実験1の基礎となる Constans の研究も記憶しにくい状況で、OCD 患者・健常者の記憶成績に差が生じるような状況ではなかったと思われる。

実験1のデータを従来の基準で準臨床群に群分けを変え、分析をおこなっていた結果も、Constans の研究結果及び実験1の結果と一致するものであった。このことから、先行研究のような実験課題では、確認傾向者・強迫確認傾向者の記憶の悪さやリアリティモニタリング及び確信度の高さを測定することができないことを示唆したことになるだろう。

確認強迫者の特徴が浮き彫りになるようなリアリティモニタリング課題があるのか、課題の問題ではなく、リアリティモニタリングに問題はないのかを検討する必要がある。

また、別なものを見ていた・感覚器の低下（疲労・居眠り）や時間切迫のため慌てていたなどの認知・認識のミス、記憶違いなど判断・決定ミス、操作・動作ミスがエラーの原因となることを、我々は体験的に知っている。しかし、こうした事故が起こるかもしれないという意識は、確認行動を誘発することもあるかもしれない。そうでない場合もある。「急いでやったら、手順を見落とした経験がある。」という過去の知識から、「さっき急いでいたから、事故につながるミスがあるかもしれない。」ように考えを巡らせ、確認行動をおこなうことがある。同じ体験をしていても、確認行動には及ばない場合もある。よって、事態をどのように認知し、主観的確信度と対処行動という一連の流れのなかでモニタリングについて考える必要がある。

最後に、強迫的確認行動が続いていく維持要因として、OCD 患者の記憶障害が領域固有な強迫症状にいたるのは、強迫行為の結果であるという見解が注目されつつある（杉浦，2002）。Tolin（2001）は脅威対象・非脅威刺激、ニュートラルな刺激を繰り返し提示し、OCD と健常者の記憶の正確性と記憶への確信度を測定した。その結果、OCD 群は脅威刺激を繰り返し提示されることで記憶への確信が低下していくことを明らかにしている。また Van den Hout（2003）も確認を繰り返すことで親和性が高まり、詳細さ・鮮明さのない想起につながり確信度が減少するという結果

を得ている。モニタリング機能というのは、繰り返し効果に弱い面があるかもしれないことを示すデータであると言える。

このことから、モニタリングがそれに伴う情動などによって、どのような状況で機能不全につながるのかという視点が必要となってくると思われる。そのためにも、健常者を対象に、まず何度も確認行動をする人とそうでない人は、どのような違いがあるのか検討し、確認行動に至るまでに、どのような心理過程が働いているのかを明確にしていきたい。

#### 引用文献

- Brown, H. D., Kosslyn S. M., Breiter H. C., Baer L., Jenike M. A. 1994 Can Patients with Obsessive-Compulsive Disorder discriminate between Percepts and Mental images? A signal detection analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, **103** (3), 445-454
- Constans, J. I., Foa, E. B., Franklin, M. E., & Mathews, A. 1995 Memory for actual and imagined events in OC checkers. *Behaviour Research and Therapy*, **33**, 665-671.
- Hermans D., Martens K., De Cort K., Pirters G, Eelen. P. 2003 Reality monitoring and metacognitive beliefs related to cognitive confidence in obsessive-compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy*, **41**, 383-401.
- Hodgson. R. J., Rachman. S., 1977 Obsessional-compulsive complaints. *Behaviour Research and Therapy*, **15**, 389-395.
- Johnson, M. K., & Ray, C. L. 1981 Reality Monitoring. *Psychological Review*, **88**(1), 67-85.
- 金城 光 2001 ソース・モニタリング課題を中心としたソース・メモリ研究の動向と展望 心理学研究, **72** (2), 134-150.
- McNally, R. J., & Kohlbeck, P. A. 1993 Reality monitoring in obsessive-compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy*, **31**, 249-253.
- 大谷貴重 岩永誠 生和秀敏 2003 確認強迫傾向におけるリアリティモニタリングの影響, 広島大学総合科学部紀要Ⅳ理系編, **29**, 27-39.
- Rachman, S. 2002 A cognitive theory of compulsive checking. *Behaviour Research and Therapy*, **40**, 625-639.
- Radomsky, A. S., & Rachman, S. 1999 Memory bias in obsessive-compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy*, **37**, 605-618.
- Rubenstein, C. S., Peynircioglu, Z. F., Chambless, D. L., & Pigott, T. A. 1993 Memory in sub-clinical obsessive-compulsive checkers. *Behaviour Research and Therapy*, **31**, 759-765.
- Sher, K. J., Frost, R. O., & Otto, R. 1983 Cognitive deficits in compulsive checkers: an exploratory study. *Behaviour Research and Therapy*, **21**, 357-363.
- 杉浦義典 1996 強迫性障害への認知行動アプローチ概観と展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **36**, 333-339.

杉浦義典 2002 強迫性障害. 下山晴彦・丹野義彦(編)  
講座臨床心理学, 東京大学出版. 81-98.

Tallis F. 1997 The neuropsychology of obsessive-compulsive disorder: A review and consideration of clinical implications. *British Journal of Clinical Psychology*, **36**, 3-20

Tolin, D. F., Abramowitz, J. S., Brigidi, B. D., Amir, N., Street, P. G., & Foa, E. B. 2001 Memory and memory confidence in obsessive-compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy*, **39**, 913-927.

search and Therapy, **39**, 913-927.

鵜木恵子 1999 高不安者の脅威刺激に対する処理バイアス—確認強迫の高低による比較. 性格心理学研究, **8** (1), 43-54.

Van den Hout, M., & Kindt, M. 2003 Repeated checking causes memory distrust. *Behaviour Research and Therapy*, **41**, 301-316.

#### 付録1 Maudsley Obsessive Compulsive Inventory 日本版

	はい	いいえ
1. 不便だと思うので、公衆電話は使わないようにしています。	○	×
2. いやな考えにとりつかれて、それからなかなか離れません。	○	×
3. 私は人一倍正直であろうと心がけています。	○	×
4. 何事も時間通りにできないためだと思いますがよく遅れてしまいます。	○	×
5. 動物に触れるのがあまり汚いとは思いません。	○	×
6. ガスの元栓や、水道の蛇口、ドアの鍵などを閉めたかどうか何度も確認しないと気がすみません。	○	×
7. 私は、非常に融通のきかない人である。	○	×
8. 毎日のようにいやな考えが意志に反してわき上がってきて困っています。	○	×
9. 偶然、誰かとぶつかるかどうかと過剰な心配をすることはありません。	○	×
10. 日常の何でもないことをしていても、これでいいのかひどく疑問に思ってしまう。	○	×
11. 私は子供の頃に、両親はどちらも特に厳しくありませんでした。	○	×
12. 何度も繰り返してやり直さないと気がすまないので仕事が遅れることがあります。	○	×
13. 石鹸は普通の量しか使いません。	○	×
14. 私には不吉な数字があります。	○	×
15. 手紙を出す前に、何度も相手の住所や名前を確認することはありません。	○	×
16. 朝の身支度にそれほど時間はかかりません。	○	×
17. 私はそれほど潔癖性ではありません。	○	×
18. 細かいことまで、あれこれ考えすぎて困ってしまいます。	○	×
19. 手入れのいきといたトイレなら何のためらいもなく使うことができます。	○	×
20. 今困っていることは何度も確かめないと気がすまないことです。	○	×
21. バイ菌や病気などのことは特に気になりません。	○	×
22. 私は何度も確かめる方ではありません。	○	×
23. 日常生活をどのように行うかを厳密に決めていません。	○	×
24. お金に触れると手が汚くなるとは思いません。	○	×
25. 普通の時に、数を確認しながらすることはありません。	○	×
26. 朝の洗面に時間がかかります。	○	×
27. 多量に消毒剤を使うことはありません。	○	×
28. 何度も確かめるので、毎日ひどく時間がかかってしまいます。	○	×
29. 帰宅後、服をかたづけるのにあまり時間はかかりません。	○	×
30. いくら慎重に行ったところで、うまく行かないと思うことがあります。	○	×